

やればわかる
「新聞に投書してみよう」
の充実度

高野光男

教科書がさまざまな教室での使用を想定して編集される以上、最大公約数的な教材化が求められるのは、教科書の宿命といってよいだろう。だから、教師は教室の実態に応じて、その教室に適した授業の進め方を工夫しなければならぬ。それは教師の重要な仕事のひとつだし、ここで教師の力量も問われ、それゆえに授業がうまくいったときの喜びも大きいのだ。

だが、「新聞に投書してみよう」という単元の場合ほとんどの教室でも、教科書どおりの手順で行えば、十分に授業展開が可能である。そもそもこの単元の原型自体が実際の授業から生まれ、さらに編集段階でのブラッシュアップを経ることで、課題の指示から使用するプリントに至るまで、実に取り組みやすくて上がっている。それでいて、生徒の反応もよい。多くの先生から取り組みやすい教材であるとの評価をいただき、各地の国語研究会で実践報告も現れてきている。

最近の例では、NIEの実践を進めている菊池陽子先生のすぐれた授業レポート「NIE―続・国語科における私の実践」が『月刊国語教育』東京法令出版、二〇〇五年三月に掲載されている。菊池先生の授業は、レポートにもあるように、三省堂の『国語総合 現代文・表現編』のワークシート（『国語表現Ⅰ』とほぼ同じである）をそのまま利用した、高校一年生全員が新聞投稿に挑戦するという授業で、

レポートからは生徒が生き生きと取り組む様子が伝わってくる。もちろん、これは菊池先生の経験に裏打ちされているからで、先生の授業を参考にすればさらに充実した授業実践が可能となるだろう。

投書は意見文の一種なので、堅苦しく、またむずかしい教材という印象をお持ちになる先生もいるかも知れない。しかし、授業を行ってみるとこれが全然、違うのだ。自分が書いた意見文が教室という閉域を超えて読まれるというリアリティ、いわゆる「実の場」が所与のものとしてある。また、体験に基づいて意見を述べるといふ思考のあたりが、高度情報化社会が強いる「情報から思考へ」という回路と異なっている点も、現代を生きる生徒のことばの学習として大きな意味をもっている。しかも、実際に生徒の投書が新聞に載ったりすれば、学習意欲を喚起するという点で、その教室だけでなく、別の教室、さらに別の学年へと波及していく効果もある。

百聞は一見に如かずで、先生方には、ぜひ取り組んでみていただきたいと思う。

（『国語表現Ⅰ』編集委員）



筆者が平成16年度に取り組んだ授業で、新聞に掲載された3名の投書。